

## 指導と評価の計画【地理歴史科：歴史総合】

<b>単元名</b> 近代化と私たち 第4章 帝国主義の展開とアジア
---

<b>内容のまとめり</b> B 近代化と私たち (3) 国民国家と明治維新
--

### 1 単元の目標

- ・列強の進出と植民地の形成、日清・日露戦争などを基に、列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容を理解する。
- ・帝国主義政策の背景と帝国主義政策がアジア・アフリカに与えた影響などに着目して、国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、帝国主義政策の特徴、列強間の関係の変容などを多面的・多角的に考察し表現する。
- ・列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容に対する関心を高め、現代的な諸課題について主体的に追究しようとする態度を養う。

### 2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・明治政府の外交方針と日清・日露戦争が、東アジアの国際関係にどのような影響を与えたのか理解している。 ・帝国主義政策を進める背景と列強の政治・経済上の動向を理解している。	・産業の変化と関連付けながら帝国主義の背景や進展について、主要国の動向を考察し、表現している。 ・欧米列強と日本との国際関係上の変化や各国の思惑などを関連付けて多面的・多角的に考察している。	・帝国主義政策の下で戦争が頻発した理由について、自身や現代との関わりを踏まえて主体的に追究しようとしている。

### 3 指導と評価の計画（6時間）（○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善につなげる評価」）

次	時	学習活動	評価の観点			評価規準等
			知	思	態	
第①次	第1時	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <b>【単元を貫く問い】</b>                      帝国主義政策における戦争の頻発を人々はどのように捉えていたのか。                 </div>				
		【ねらい】 日清戦争の勃発の背景を東アジアの国際情勢と関連付けて理解し、開戦の意義や勝利によって芽生えた国民意識について資料を基に考察することができる。 【課題】 日清戦争によって日本・清・朝鮮の三国では何が変わったのだろうか。				
		・中学校までの学習を踏まえたうえで朝鮮、中国、日本のそれぞれの国際情勢が複雑に絡み合い、開戦に至った経緯を理解する。 ・福沢諭吉の社説の読み取りを通して、当時の戦争に対する一つの見方を知り、福沢のような意見の背景には何があったのかを考察し、文章で表現する。	●	○		・日清戦争前後の経緯を、東アジアや列強の情勢と関連付けて考察できている。 ・日清戦争の勝利によって日本国内がどのように変わっていったのかを表現できる。

第②次	第2時	<p>【ねらい】 資料と既習内容を基に、日本の産業革命の特徴について述べることができる。</p> <p>課題 日本の産業革命は、他国と比較してどのような特徴があるのだろうか。</p>							
		<ul style="list-style-type: none"> <li>既習のイギリスの産業革命の特徴をペアワークで振り返り、史料内容と産業革命の年表から、日本の産業発展には、政府による民間の経済活動を促すための諸政策があった理解する。</li> <li>資料から日本の貿易の特徴を読み取り、アジアや欧米との関係性について考察する。</li> </ul>	●	●					<ul style="list-style-type: none"> <li>既習内容と複数の資料から読み取れることを結び付けて産業革命の特徴を述べることができる。</li> </ul>
第③次	第3時	<p>【ねらい】 経済・産業の変化が帝国主義政策に影響を及ぼし、列強の二極分化を招いたことを知識事項と関連付けて考察することができる。</p> <p>課題 a 欧米列強が帝国主義政策を進めた背景と目的は何だろうか。</p>							
		<ul style="list-style-type: none"> <li>資料を基に、ペアワークを通して第1次産業革命と第2次産業革命の特徴の違いを挙げる。</li> <li>第2次産業革命の特徴から植民地拡大の目的を文章で表現する。</li> </ul>	●	●					<ul style="list-style-type: none"> <li>第2次産業革命の特徴を踏まえて、エネルギーの変化や独占資本主義の出現が植民地拡大を加速させたことを表現できる。</li> </ul>
第③次	第4時	<p>課題 b 植民地支配の拡大により、列強間の外交関係にどのような変化が生じたか。また、支配下に置かれた人々はどのように対応したか。</p>							
		<ul style="list-style-type: none"> <li>既習内容を踏まえてアフリカ・太平洋地域の分割を例に、列強間の支配拡大の目的と対立関係の変化について学習する。</li> </ul>	●	●					<ul style="list-style-type: none"> <li>植民地獲得の加速化が第一次世界大戦の原因ともなる列強の二極分化を招いたことを理解する。</li> </ul>
第③次	第5時	<p>【ねらい】 多様な視点・立場からみた日露戦争の史料を読み、知識と結び付けて日露戦争の影響を考察することができる。</p> <p>課題 日露戦争の勝利は国内外にどのような影響を与えたのか。</p>							
		<ul style="list-style-type: none"> <li>日露戦争勃発の背景と戦後の韓国併合までの経過を学習したうえで、グループワークを通して、多様な視点から述べられた日露戦争での勝利に関する史料を読み、各方面に与えた影響を考察する。</li> </ul>	●	●					<ul style="list-style-type: none"> <li>日露戦争の結果、日本国内や周辺地域、列強、植民地支配を受けている国々にどのような影響をおよぼしたか、多面的に考察している。</li> </ul>
第③次	第6時	<p>【ねらい】 単元を貫く問いについて、本単元での学習を振り返り、問いに対する自身の考えをレポートにまとめる。</p>							
		<ul style="list-style-type: none"> <li>第1時で提示した単元を貫く問いに対する自身の考えを、単元の学習内容を踏まえてレポートにまとめる。</li> </ul>	●	○					<ul style="list-style-type: none"> <li>当時の情勢を踏まえながら、「戦争」に対する現代の我々との捉え方の違いを考察し、表現する。</li> </ul>

#### 4 「指導と評価の一体化」を踏まえた学習評価の改善について

##### 【生徒が考察し、表現したものの評価方法の検討】

≪ I ≫ 第1時の課題：「日清戦争によって日本・清・朝鮮の三国では何が変わったのだろうか」について

第1時では、生徒にとって既習事項の多い日清戦争を授業の主なテーマとしたため、日清戦争の勃発から戦後の影響までを東アジアや列強の情勢と関連付けて考察させることを目的として、上記の課題を設定した。以下には「日清戦争の前後の日本の変化」についての生徒の記述を例に評価方法を検討した

結果について記載する。

(1) 思考・判断・表現における評価B：「おおむね満足できる」内容について

●授業者が想定した評価Bを構成する要素

- ・要素①：日清戦争の勝利によって変化した、東アジアにおける日本の立場
- ・要素②：日清戦争の勝利によって生じた内政の変化／日本の人々の意識の変化

授業内容を踏まえ、この2点に言及しているかを評価のポイントとした。

(2) 生徒が記述した内容の検討

【例1：評価B「おおむね満足できる」状況と考えられる生徒の記述】※学習支援ソフト上で生徒が記述したもの

1-1	日清戦争によって日本・清・朝鮮の三国では何が変わったのだろうか。
日本	日清戦争で勝利したことによって、東アジアの力関係が崩壊し日本がアジアのなかでも列強に含まれるようになった。この戦争の賠償金によって日本の国家予算が潤い、
	軍事拡張に資金があてられたため軍力が強化された。日本がアジアにおいて成りあがったので、脱亜入欧のようなヨーロッパに近づく考えが生まれた。

1-1 に関しては、上記の要素①②に当てはまる記述がみられると判断した。

1-2	日清戦争によって日本・清・朝鮮の三国では何が変わったのだろうか。
日本	清に勝ったことによって脱亜入欧などのアジアの中で一番という意識がどんどん芽生えていった。また列強にはいることを目指していきこのときは国民のごとも自国の近代化のほうが重要視されていたのかもしれない

1-2 の記述では戦争の勝利がもたらした人々の意識の変化については言及しているが、要素②の内政の変化に関する記述はみられない。しかし、「個人よりも自国の発展を優先する考えがあった」という時代背景を基にした考察に至っている点は評価できると判断し、Bとした。

【例2：評価C「努力を要する」状況と考えられる生徒の記述】

	日清戦争によって日本・清・朝鮮の三国では何が変わったのだろうか。
日本	日清戦争の賠償金によって官営模範工場をつくって
	欧米に近づけた

例2では日清戦争の勝利によって生じた内政の変化について言及しているように思われるが、意識の変化について述べられておらず言葉足らずな印象を受ける点と「官営模範工場」という用語の誤り（恐らく八幡製鉄所を指す）から、Cとした。

## ≪ II ≫ 第6時の課題：単元を貫く問いに対するレポートの評価について

第6時では、本単元のまとめとして、第1時より提示していた「帝国主義政策における戦争の頻発を人々はどのように捉えていたのか。」に対する生徒の考えをレポートとして記述させた。日本の日清、日露戦争の勝利だけでなく、第2次産業革命の下で進められた欧米の帝国主義政策など単元での学習内容を踏まえて、現代の我々と「戦争」に対する認識がどのように異なっていたか考察・表現できているかを評価の主軸とした。

(1) 評価項目：主体的に学習に取り組む態度

●評価基準

評価A：単元の学習内容を踏まえて、戦争が頻発した理由との結び付けた記述がみられ、欧米の情勢と日本の情勢を総合した深い考察に基づき主張が述べられている。

評価B：単元の学習内容を踏まえて、戦争が頻発した理由と結び付けている記述がみられる。

評価C：単元で学習した知識事項の内容が誤っていたり、教科書の記述の羅列でとどまっており、戦争が頻発した理由との結び付く記述がみられない。

(2) 生徒が記述した内容の検討

【例1：評価A「満足できる」状況と考えられる生徒の記述】

1-1

Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線を無視して記入してOKです。)
当時は欧米に帝国主義の考えが根強かったことから、特に列強における為政者は自分たちの国を世界のスタンダードにしたい、そのために植民地を拡大して領土を増やし、市場も得ることで工業も発達させる、という思想が強まっていた。そのため、戦争はやむ無し、むしろ戦争をして自分たちの利益を守ったり広げたいという考えが大きかったと考える。 また、国民の間にも帝国主義の考えが浸透しており、戦争に関して肯定的な意見の方が多かったと予想されるが、増税や食料・日用品の不足などから国民の生活は苦しくなることがあり、国内で肯定派と否定派の意見が大きく分かれることもあった。 ほかにも、自分たちの利益のためだけではなく、外交関係において力を示したいという理由で戦争を起こす国があるなど、当時は戦争に対する人々の感じ方・考え方が現代よりも軽い感じがうかがえた。
一方、植民地や列強と呼ぶには至らない国では、列強が戦争を仕掛けてくることは、自国の政治・文化が大きく変わる転換点になることがうかがえる。清を例に考えると、日清戦争以前は中体西洋などの保守的な考えが多かったが、日清戦争に敗れ、中国分割が進んでから甲申事変や辛亥革命などの革命の動きが活発になった。 戦争を仕掛けられた時点での為政者にとっては戦争に敗れば不利益にしかならないと思うが、国民の革命意識を活発化し、その国が発展することにつながる点では、国民にとっては良いのかもしれない。

1-2

Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線を無視して記入してOKです。)
ヨーロッパにおいて戦争という行為は野蛮だと言われていたにもかかわらず植民地の拡大はあまり反対はされてはいない。戦争が起これば、それなりに物資などにお金がかかる上に死人も出るため国民の税があがったり、家族を失う原因にもなりうるので国民にとって戦争はあまりメリットがないため進んでやっていたほしいものではなかったと考えられる。しかし、植民地の拡大はその土地の資源を得られたり、植民地との貿易により国の生産品を売りつけることができるため国の財源が増え、税の負担も少し軽くできるので国民にメリットがある。政治的な面では、戦争に勝利することでより世界においてより影響力を持つことができるし、次の戦争への賛同が得られる。植民地の拡大は自分の国の経済を成長させられ、そのお金で国内の問題解決につながられるメリットが多いものだった。一方、日本でも国家の間での戦争での敗北をまだ経験していないため、戦争に勝った時のメリットに目を向けがちだったと考えられる。実際に日本は日清戦争に勝利したことで工業が発達し、日露戦争に勝利したことでアジアにおける影響力が増した。ただし、日露戦争の講和条約で賠償金を得られなかったことは日本国内での戦争に対する否定的な意見を増やした。そのため日本国内は戦争を肯定する人と否定する人で別れたと考えられる。



1-3

Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線は無視して記入してOKです。)
まず日本について 日本では、日清戦争時は反戦論も目立たなかった。為政者も戦争に肯定的だった。山県有朋は朝鮮は日本の「利益線」だと述べている。日清戦争
を起こしたのも朝鮮における <u>日本の優位性を強めるため、ひいては日本のためだと考えていた</u> のではないだろうか。しかし日露戦争の時には少数ではあるが反戦の意見もあった。(与謝野晶子 幸徳秋水など)国民の意識の変化がわかる。また、日露戦争は日本がロシアに満州、および朝鮮の権益を奪われると危惧した結果起こったものだ。このように19~20世紀初頭の戦争は <u>植民地が関係している</u> 。(南アフリカ戦争 イタリアトルコ戦争 米西戦争など)為政者は資本の輸出や原料の輸入、市場の確保のために植民地を増やしていた。つまり列強の為政者にとって <u>植民地を広げることは自国の発展にとってとても重要であり、もし出遅れば他の国に出遅れてしまうかもしれない</u> 。またイギリスの小説家ラドヤード・キップリングは列強の国々が植民地化を進め、 <u>現地の人々を文明化させるのは白人の義務だとも</u> 言っている。国民も植民地のための戦争を肯定的にとらえていたのだろう。
日本と欧米諸国の例から考えると、この時代の人々は、戦争によって領土を広げることはとても重要で、現代のような <u>反戦の考えは少数派だった</u> と言える。

1-4

Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線は無視して記入してOKです。)
<u>イギリスやアメリカといった強国は、戦争を国を豊かにするものだと</u> とらえていました。豊かな資本を輸出するために植民地を求めて帝国主義政策を進め、アフリカやアジアの国々は欧米の植民地となり支配されました。宗主国である欧米は植民地を犠牲にしてますます発展していきましたが、 <u>植民地となった国々は様々なものを失いました</u> 。国を運営する権利は宗主国のものとなり、 <u>劣悪な労働環境で働くことになりました</u> 。このことから植民地にされた国々は戦争は戦争が原因で支配されるようになったからよいイメージはないと思います。
<u>国民の戦争のとらえ方は、良いものではなかった</u> と思います。戦争をすればどうしても犠牲者が出ます。日本では徴兵制があって家族がいかが戦争に参加しなければなりません。与謝野晶子の「君死にたもうことなかれ」にあるように家族や、家、職など様々なものを人は失ったでしょう。だから国民にとって戦争は忌避すべきものであったと思います。その不満が現れたのが各国で行われた独立運動や革命だと思います。しかし、戦争によって豊かな暮らしをできるようにになった人もいます。戦勝国の国民はその代表例です。 <u>その人にとっては、戦争はいいものであった</u> かもしれません。国または人によって考え方は違います。でも、やっぱり反対意見のほうが多いと私は思います。 <u>豊かな暮らしをできるようにになった人の中には、そのために犠牲になった人がそれ以上に隠れています</u> 。何かを発展させるには犠牲がつきものではありますが、戦争はその犠牲が大きすぎます。
よって、 <u>強国とその国民は戦争の恩恵を受けていたため戦争に肯定的で、そのほかの国は否定的であると私は考えた</u> 。

1-1~1-4の記述に関しては、主張の内容に違いはあるが、単元での学習事項を例に挙げ、さらに日本・欧米で戦争が頻発した背景を総合して「戦争の遂行は自国の利益・発展につながった」「戦争の勝利が国民に豊かさをもたらした」という論を述べている点が評価できると判断した。

【例2：評価B「おおむね満足できる」状況と考えられる生徒の記述】

2-1	<p>Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線を無視して記入してOKです。)</p> <p>自国の領土が増えるのならば戦争で無理やり奪ってもいいだろうという考えや、戦争反対派の考えなど、様々な考えの人がいたと思う。 戦争賛成派の政府は、戦争をして領土を勝ち取ることで豊富な資源をよりたくさん獲得したいという利己主義・エゴや、戦争に勝利することで国としての地位を高めたいという目的があった。 一方で戦争反対派の一部の国民は、国の兵の犠牲を出したくなかったり、街を壊したくないという思いがあった。 日露戦争がその例だと考える。戦争に勝利して、アジアの中での地位を高めたいと思っていた日本政府と、「君死にたまふこと勿れ」を書いた与謝野晶子などの国民とでは、戦争に向かう姿勢が少し違ったと思う。</p>
-----	---

2-2	<p>Q2：授業の内容にも言及しながら第4章の「問い」についてあなたの考えを文章で述べてみよう。 (Metamojiの人は罫線を無視して記入してOKです。)</p> <p>帝国主義の広がりにより市場や資源を求めて植民地を広げる動きが活発になった。日本では福沢諭吉が脱亜論を掲げ清や朝鮮に対する武力行使を容認する議論が勢いを増した。その後日清戦争に勝利し、下関条約が結ばれ遼東半島など譲り受け、賠償金を手に入れた。しかし三国干渉によって遼東半島を返還することになりロシアに対する反感が高まった。義和団戦争が起こり8か国が鎮圧したがロシアは満州に軍を残したままにした。日本はこれを警戒しイギリスと日英同盟を結んだ。国内では開戦論も反対論も出ていたが日露戦争が起こった。日本海海戦で日本は勝利をあげたが想像以上に戦争が長引いてお互い戦争を続けるのが困難になり、アメリカが仲介となってポーツマス条約が結ばれた。国民も戦争はすぐに終わるだろうと思っていたと思う。そんなに苦しくて長い戦いになるなんて予想できなかったと思う。 国民は国の勢いに乗かって行動・発言をしていると思う。戦争に勝っていれば調子に乗るし、負けていけば士気も下がる。だから政府もわかって勝っていると嘘をつく。いわば意地と意地のぶつかり合いだ。たぶん少しの人しか戦争のことを理解し考えていないのだと思う。 戦争によって国が成長するのも皮肉なものだ。他を排除した未来でその先に待つものはない。</p>
-----	---

2-1、2-2では、「戦争の遂行は自国の利益・発展につながった」「戦争の勝利が国民に豊かさをもたらした」という論を述べている点は評価できるが、知識の羅列が目立ち、日清・日露戦争のみしか言及しておらず、総合した考察が不足していると判断したため、B評価とした。

## 5 今後の課題

やはり実際に生徒が記入したものの評価の難しさに直面することが多かった。「難しさ」とは、生徒の表現をA～Cに評価することも勿論あるが、授業者として設定した評価規準の妥当性に対することも含む。思考・判断・表現の評価規準づくりにおいて大切なのは授業者の歴史認識を生徒に押し付けないようにすること、すなわち授業者の歴史認識をスタンダードとしてしまわないようにすることだと思われる。授業内容や提示された資料を踏まえて、生徒がどの程度学習した知識と結び付けられて表現できて

いるのかを評価の主軸としなければならない。そのためには、「歴史の見方・考え方」を生徒に提示していく必要がある。現代に生きる我々と当時の人々の考えることの内容の違いには気付くことができる生徒が多いが、重要なのは「我々との考えの違いの背景にあるもの」に気付かせることである。当時の人々が置かれていた環境や情勢などを踏まえたうえで、「考えていた事の内容の違い」に至ることができるような授業設計が求められるのではないかと思う。まさしく歴史総合における「問いを表現する」活動は、「過去との違いに気付く」ためのものであり、あとに続く単元の授業内で、その違いの背景に気付くことができる構成となっているのではないだろうか。その上で、現代の我々が抱える諸課題へ関心を抱かせ、解決策を生徒自身が提示していくことへと繋げていくべきであると思う。